

死ぬる用
か、意は何

第一、神
と和らぐべ

大なる救

神の子た
るの自覚
ありや

第二、潔
められた
る人とな

三三〇
然らば死ぬる用意とは何か。諸君は兼々之を辨へて居るべき筈である。併し乍ら大事のこと故、余は重ねて少し許り、其説明をなし、諸君の注意を促がし度と思ふ。

第一、神と和らぐべき事。死ぬる用意の第一は神と和らぐことである。人は皆死んだ先では神の前に出で、しかも大なる審判の座に立つべき筈の者である。然るに諸君はこれ迄神に逆らひ、其聖旨を痛めた者である。或は今も尙神の旨に反いて居る者があるかも知れない。さり乍ら神は獨子基督を世に遣はし、種々難儀苦勞を経たる後、十字架にかゝつて迄も、我等を救ふ道を立てさせ給ふた。それ故諸君は今更此大なる救を等閑にし、神の權威を無視し、其恩恵を拒みて、罪の重荷を負ふたる儘、審判の座に出る様なことがあつてはならぬ。否、否、否、諸君は必らず神と和らねばならぬ。今から罪を赦され、神と一つになつて居らねばならぬ。これは諸君が何時死んでも可い支度の第一である。

諸君は今現に神と仲直りをして居るか。自ら省みて我は神と和いで居ると言ひ得るか。我等が神と親しき交際をなすといふは、決して小さき事でない。之は諸君に取つて最も喜ばしき實驗である。重ねて其心の中を吟味し、我は果して、慥かに救はれて神の恩恵のうちにいるといふ證を有するか、否やを調べて見ねばならぬ。聖霊は凡て神の子たる我等の胸中に此證を與へるものである。「聖霊自ら我等の靈と偕に、我等が神の子たるを證す」(羅八〇十六)とは此事である。諸君は今現に、此證を心に蓄へて居るか。若し然うでなくば今直ちに之を求めねばならぬ。なせかといふに、救はれて神の子たる證を有ぬ人は、未だ死ぬる用意の調ふたものではないからである。

第二、潔められて居るべき事。死ぬる支度の第二は潔められて居るべき事である。諸君は此世を去ると直ぐに、天國に行くことを望むであらう。此世の連鎖がほごけると直ぐに、黄金の門をくゞつて神の國に入ることを望むに相違ない。余は眞

天國の民
に格な
可ら
ず

基督は處
を備へて
待てり

天國は聖
き國なり

に之を待ち望む者である。然るに天國といふ處は、唯之に入るべき用意のある人の爲めに備へられたる處である。それ故諸君に取つて大切なる問題は「我は果して神と其使の前に出で、共に同じ處に住むの資格あるか、否や」といふことである。而して諸君が若し其等の點に不確實であらば、固より決して死ぬる用意の調ふたるものと謂ふことは出来ない。耶穌基督は久しい以前から、既に諸君の爲めに處を備へて居給ふ。今救主が若し向ふ六ヶ月間、天國に来て一緒に住まへと仰せられたとしても、諸君は必らず大騒をして、其支度を調へるに相違ない。況んや六ヶ月や一年のことではなく、未來永劫いつく迄も、來つて我と偕に住へと招き給ふのである。諸君はそれに對して如何なる準備を調へて居るか。天國は言ふ迄もなく聖き國である。唯潔められたる人のみ住ふべき場所である。凡て高慢、怨恨、憤怒、憎惡、其他の淺ましく、賤しき心を有つた者は、そこに入ることが出来ない。即ち聖書に「人若し潔からざれば主に見ゆることを得ず」とは此事

第三、己
が本分を
盡すべし

我が本分
を如何か

である。唯潔められて神の旨を行ふ者のみ、能く死んで後天國に入ることが出来るのである。
第三、己が本分を盡すこと。死ぬる支度の第三は、其周圍の人々に對し、忠實に己が務を盡して居る事である。「其主人來る時に、此の如く勤むるを見らるゝ僕は幸福なり。」(路十二〇四三) 諸君は其日毎の本分を盡して居るか。斯く言へば諸君の中に、或は「さらば我が本分は何か」と尋ねる者があるかも知らぬ。余は答へていふ、諸君の本分とは神が諸君に爲せと命じ給ふたる働である。其中には自分自らに對し、其家族に對し、又其感化の下に來る凡ての人々に對して、現在及び永遠の眞正の福祉を圖る爲めに、力を盡すべき事を含んで居る。諸君が若し果して右いふ如き意味に於て、怠らず其本分を盡して居るならば、諸君はいつ死んでも差支なき用意のととのふたことを、互に祝ふて然るべきものである。

(二五) クリスマス

目出度き
祭日

最も有益
に過す心
得

第一、平
人の體面
を保て

クリスマスは、いとも貴き制度である。これは凡ての人々が祝ひことぶく所の祭日である。取分け年少き者に取りては、復たなき目出度き祝日である。クリスマスには贈物をとりかはし、樂みをなし、御馳走を食べ、親戚知友久々に相會するなどいふのが、基督教國の慣例である。クリスマスが此の如く非常に目出度く、又愉快なる日であるに就ても、之に與かることの出来ない人々に對しては、如何にも氣の毒な感とするのである。余は今我が軍人に對し、然らば如何にせば、此クリスマスをも最も有益に過し得べきかといふ事につき、數箇條の忠告を試みたいと思ふ。

第一、諸君はクリスマスにも、亦其他の時にも、常に眞の救世軍人たる體面を保たねばならぬ。茲に「一遍坊主になつた者は一生坊主で通せ」といふことがある。

第二、浮
いた交際
を避けよ

其通り一遍救世軍人になつた者は一生救世軍人で通さねばならぬ。如何なる場合にも救世軍人に不似合なる事をしてはならぬ。諸君は制服着用の儘では出来ないふざけた眞似をする爲めに、暫らく其制服を脱ぐ様な事があつてはならぬ。兎角クリスマスや、新年には、興に乗つて、つい平生の主義信仰と兩立し難き舉動をなす恐がある。さり乍ら救世軍人は年中どんな所でも、救世軍人の行をなし、時と場合に由て裏表のある世渡をしてはならぬ。

第二、又注意して諸君の宗教を害ふ如き交際を避けねばならぬ。といふても殊更其親戚知人と仲違をする必要はない。さり乍らクリスマス又は新年だからといふて、其平生の嗜なみを忘れ、世俗的の生涯を送る人々に混じて其相繼をうち、又は道化した眞似をする仲間に入らねばならぬ筈はない。先づ考ふべきは靈魂上の大事である。唯一時己が一身の快樂を求め、又は他人の喜を買ふ爲めに、靈魂上の大事を餘所にする様な事があつてはならぬ。

第三、飲
食の慾を
慎め

齒を以て
墓を掘る
勿れ

第四、ふ
ざけた眞
似をする

第五、ク
リスマス
の意味を
思へ

第六、耶
穌を拜め

第七、彼
の心を心
とすべし

第八、弱
者を顧み

第三、又飲食の慾を擅にして其健康を害ふてはならぬ。大食して身體を傷めるのは、大酒して健康を破るに次で、神に忌まれ、又人に害ある行である。酒を飲み過して天死するよりは、食物を食へ過して壽命を縮める人が餘程多い。汝の齒を以て汝の墓を掘つてはならぬ。然るにクリスマスは目出度き祭日だからといふて、御馳走の食へ過しなどするは悪い風俗である。諸君は然ういふ仲間に加はつてはならぬ。却つて身を以て自制と樽節との模範とならねばならぬ。

第四、又救世軍兵士にあるまじき不真面目なる悪る洒落などして、其本心を失ふてはならぬ。諸君は道理に合ふたる方法を以つて、其家族と偕に樂み、其兒供等を喜ばすことが出来る。それ故馬鹿氣た行をして、恩寵を取失はぬ様氣をつけねばならぬ。

第五、余は此の如く、色々クリスマスにたしなまねばならぬことを注意すると同時に、亦諸君が進んでクリスマスの意味を味ひ、救世軍人として何かクリスマ

スを祝ふに相當したる、善き行をなさんことを希望するのである。

第六、クリスマスは我等の主にして又救主なる耶穌が、世の救の爲めに人となり、飽く迄苦みと恥とを嘗め給ふた事を記念する祭である。そのつもりにて耶穌を拜み、之を讚め、之を愛し、樂しき歌を以て此日を祝はねばならぬ。之は世界の人民が擧つて救主の御降誕を喜び、心から感謝すべきの日である。

第七、諸君は又、耶穌が世に來り給ふたると同じ精神を其心に得、之を身に行はねばならぬ。即ち諸君は其體をも、一切の所有をも、悉く祭壇の上に置き、進んで耶穌の模範に倣はねばならぬ。又諸君に取つての「天の位」を棄て、以來唯喪はれたる者を探ねて救はん爲めに生き存へねばならぬ。さすれば天の父は喜んで諸君に豊かなる祝福を與へ給ふであらう。

第八、クリスマスに弱き者を顧みよ。諸君が多くの財産を有するか否やは別問題である。併し乍ら諸君は少くとも、パンの斷片を門前のラザロに與ふる位の心掛

がなくてはならぬ。前にも言ふ如く世にはクリスマスを楽しませるときとして祝ふこと
の出来ない人々も多く、他人が目出度き祝日を樂む時、却つて人一倍の苦勞をし
て居るものさへ少なくない有様である。諸君はクリスマスに弱き者を記憶し、殊
に寡婦や孤兒の如き者を憶えねばならぬ。彼等を尋ね出して何とか之を慰める
工夫をなせ。

第九、集會に出席せよ

第九、又小隊の集會に出席せよ。若し出来ることならば特別の野戦を營み、病める
戦友を訪問せよ。足元を忘れて浮かるゝ世の人を救はん爲めに、此日特別の努
力をなせ。

第十、人を救へし

第十、クリスマスに、出来る事ならば信仰より墮落したる者を引き戻せ。少くも
もそれが爲め何か手ごたへある運動を試みよ。年の暮から年の始めにかけては、
他行して居つた者も多く宿元に歸る季節である。其機を外さず、信仰より離れた
る者を其愛する父、眞實なる友人、又小隊の戦友の間に歸らしめよ。

諸君が最も有益にして、又幸福なるクリスマスを祝はんことを祈る。

(二六) 年末の教訓

無事に復
一年を経
たり

今年此世
を去りた
る者も多
し

今年一年の間に此世を去りて彼世に旅立したるものも少なくない。然るを如何なる思召か、神は我等を守りて安然に今日に至らしめ給ふた。此分で行けば、大方無事に今一度此世にて新らしき年を迎へ得ることであらう。それに就ても、我等はこれ迄に受けたる多くの恩恵を心から感謝し、進んで之を如何に最も有益に活用すべきかを想ひめぐらすべき筈である。

今年我等の戦友の中には、召されて救世の戦場を去り、彼の眞珠の門をくぐつて黄金の欄を過ぎ、父の家に歸つて其御膝下に近づき奉つたものも幾人かある。我等は彼等が斯くも勝利の最期を遂げ得たる事を感謝する。併しながら我等は尙此世にとり遣され、今は又重ねて此年の終に臨んで居るものである。抑々如何なる心かけを以て、此場合に處したら可いであらうか。

第一、自
省せざる
可らず

家族戦友
に對して
は如何

果さ
し誓約

余は其事に就て少しく諸君に語りたと思ふ。

第一、諸君は此際、過る一年間に誤つて犯したる凡ての罪と過失とを反省せねばならぬ。之は諸君の過る一年の生活を穢したる汚點である、又諸君の過る一年間を害ひたる仇敵である事を記憶せねばならぬ。忠實に自らを取りたいせ、其犯せる罪を數へ擧げよ。己が肉體上、精神上、及び靈魂上に、犯せる凡ての罪惡を吃度吟味せねばならぬ。

又其家族に對し、物質上、靈魂上、世話の仕方の足りなかつた所を反省せよ。諸君は又其戦友に對して義務を怠れる事を省み、彼等に對する愛情の足りなかつた事など、細かに考へ出でねばならぬ。

諸君は又其救主に對して誓約を果さざりし事、其聖旨を痛めたる事を、しらべ擧げ。及び其周囲の罪人に對して、盡し方の足りなかつた事を反省せねばならぬ。諸君は其隣人を罪と地獄とより救ふ爲めに、己が努力の届かなかつた事を十分吟

第二、悔
改めよ

味せねばならぬ。我が軍人よ、踏み止まつて、過る一年間に犯したる罪と過失とを一つづつ數へ擧げよ。殊に過る一年が諸君に取り、薄暗い不愉快なる一年であつたならば、尙更此際に於て大に反省する所がなくてはならぬ。

第二、次に大切なるは、今年一年の罪と過失とを有の儘に神に懺悔する事である。使徒ヨハネの言葉に、「若し罪なしと言はれ、是れ自ら欺けるにて眞理我等に在るなし。若し己の罪を言ひあらはさば、神は信實なる義き者なるが故に必らず我等の罪を赦し、すべての不義より我等を潔む」といふてある。其故に余は警告する、其罪を告白せ。何んでも心にこがむる行を殘らず神に懺悔し、又他人に對して濟まぬことをしたと感ずる事を、悉くお詫せねばならぬ。

第三、新
しき生涯
に入れ

第三、又凡て其心にこがむる行を、今から斷然改めねばならぬ。自らに對し、其家族に對し、事業上にも、交際上にも、凡て宜しからぬと思ふ事を一切ふり棄てよ。今から直ちに覺悟する所あり、今後は如何なる小さき事と雖も、苟も神に

第四、其
義務を擔
當せよ

忌まれ己が靈魂に害ある如き事は、斷然之と縁を切るといふ決心の臍を堅めねばならぬ。

第四、同時に大切なるは、神の命じ給ふ義務を忠實に行ふ事である。どんな問題に於ても、神の旨と我が思想と衝突する様なことを許してはならぬ。他人が若し何か濟まぬ事を仕向けた爲め、不愉快に思ふて居るならば、今それを赦してやれ。今日迄負ふことを躊躇したる十字架があらば、今から進んで之を負へ。罪人に對し、又は家族に對して缺で居つた義務があらば、今から之を盡せ。或は金錢を惜んで其爲め善事を怠つて居つた様なことがあらば、今直ちに之を償へ。而して神に誓ふて言へ、我が小隊に對し、社會に對し、神に對して負へる義務は、今より以後必らず脱りなく忠實に之を勤むるであらうと。

第五、獻
身の人の
なれ

第五、又献身して信仰の生涯に入らねばならぬ。一切を神に獻げ、唯其思召の儘をのみ、これ行ふ人となれ。

諸君が幸福なる新年を迎へん事を祈る。

五十二文集 後篇終

明治四十三年十月五日印刷
明治四十三年十月八日發行

定 價 金 四 拾 錢
郵 税 金 八 錢

編 者 山 室 軍 平

發 行 者 東京市京橋區銀座二丁目十一番地
ヘンリー、ホツダ

印 刷 者 横濱市太田町五丁目八十七番地
村 岡 平 吉

發 行 所 東京市京橋區銀座二丁目十一番地
救世軍日本々營

印 刷 所 横濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社



賣 捌 所

東京警醒社○教文館○基督教書類會社○聖公會出版社○大區福
音社○京都聖書房○救世軍の各小隊及社會事業部

スーパ大將題辭イレルト少將序文

スーパ大將傳

第參版(中佐山室軍平著定價壹圓參拾錢郵稅五錢)

●ブリス大將傳を讀む(文學士内ヶ崎作三郎氏) 救世軍少佐山室軍平氏の近著ブリス大將傳は最近傳記文學に於ける一傑作なり。前版五百六十ページの巨篇は瀟灑の改訂を経て精選せられたる材料を含蓄す。余は夙にブリス大將の事業に對して尊敬と羨望の念を抱くものなり。然れども山室氏のこの著を通讀してこの老練の生涯と事業とを初めて明確なる印象を余の頭腦に刻せり。現代社會に對する救世軍の使命の重大なる所以は一度本書を讀む者の忘却する能はざる所なるべし。著者の言文一教體の文章は直截にして流暢、華麗なる文飾を缺かざるも、熱烈の精神格表に溢る。由來余は本邦の出版界に於ける傳記文學の不振なる所を慨し、實業なる生活、献身の生涯との化身たるブリス大將の如きは、最大なる感動を讀者に與ふる資格あり。青年の座右に常に備ふ可きは理想的人物の傳記なり。ブリス大將は克己精勵の人、獨立自營の人、奮闘苦戰の人、而して同時に青年階級に推戴す。其傳記は活ける教訓なり。余は之を天下の青年階級に推戴す。ブリス大將は一大宗教家なり。理想と實際とを巧みに結合したる經世家的手腕を有する宗教家なり。職内調和の大旗幟を翻したる宗教家なり。基督教の根本原理を現時代の要求に應じて解釋したる卓見家なり。其傳記は現今の宗教家の奮闘に邦の宗教家を警醒し啓發する所少からざる可し。余は本書を宗教家の奮闘に紹介せんことを欲す。社會問題に實際問題なり。目の空論名説も一の實踐躬行に及ばず。救世軍は敢て社會の革命を主張せずと雖も、惡民を化して良民となし、貧者に施しを授け、樂に働かしめ、又は海外に移住せしむるを怠らず。其方法は迂闊なるに似て、最も實益あるものなるは疑ふべからず。余は社會問題の研究者に對して本書の一讀を要求せんことを欲す。爾智の一匹夫信仰の劍を揮へば天下を征服すべし。帝王の權威、富貴の金力、碩學の權威もこの匹夫の前に光を失ふ。靈界の奇蹟は未だ消滅せず。ブリス大將の生涯は現代の大異象なり。之を詳述し、論評し、解説したるものは山室氏の近著なり。余は著者の勞を謝するに共に、著者の畢生の心血を献げつゝある日本救世軍の上に祝福の辭を祈らんことを祈るものなり。(新人)

東京銀座二丁目十一番地

救世軍日本々營

●大將の著述

- ◎參版軍令及軍律 (兵士の卷) 特別減價金拾五錢郵稅金四錢
 - ◎再版聖潔の早わかり 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢
 - ◎大將文集 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢
 - ◎大將小品文集 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢
 - ◎ペンテコステ物語 定價金五錢 郵稅金貳錢
 - ◎參版魂を入かへる法 定價金貳錢郵稅七部迄金貳錢
 - ◎參版救と聖潔 定價金貳錢郵稅七部迄金貳錢
- 其他英文の著書色々あり

東京銀座救世軍本營

●山室中佐の著述

- ◎拾參版平民之福音 特別減價金拾錢 郵稅金四錢
- ◎參版戰爭的基督教 (品切) 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
- ◎參版ブリス大將傳 定價金壹圓參拾錢郵稅金拾五錢
- ◎日本に於るブリス大將 特別減價金七拾五錢郵稅金拾錢
- ◎參版靈魂上の病人 定價金貳錢郵稅七部迄金貳錢
- ◎參版安心立命の説 定價金貳錢郵稅七部迄金貳錢
- ◎參版生死の工夫 定價金貳錢郵稅七部迄金貳錢

東京銀座救世軍本營

●救世軍の雜書類

◎^再聖潔之葉 (アレンゲル大佐著)
定價金貳拾五錢 郵税金四錢

◎救世軍一覽
定價金五錢 郵税金貳錢

◎^原放蕩息子の諭 (アース夫人著)
定價金貳錢 郵税金貳錢

◎諸名家救世軍觀
定價金貳錢 郵税金貳錢

◎ブーリス大將と救世軍
定價金貳錢 郵税金貳錢

◎救世軍々々歌
定價金五錢 郵税金貳錢

別に日本文、英文の聖書類種々
又英文の救世軍出版物色々あり

東京銀座救世軍本營

救世軍の機關とよきのこゝろ

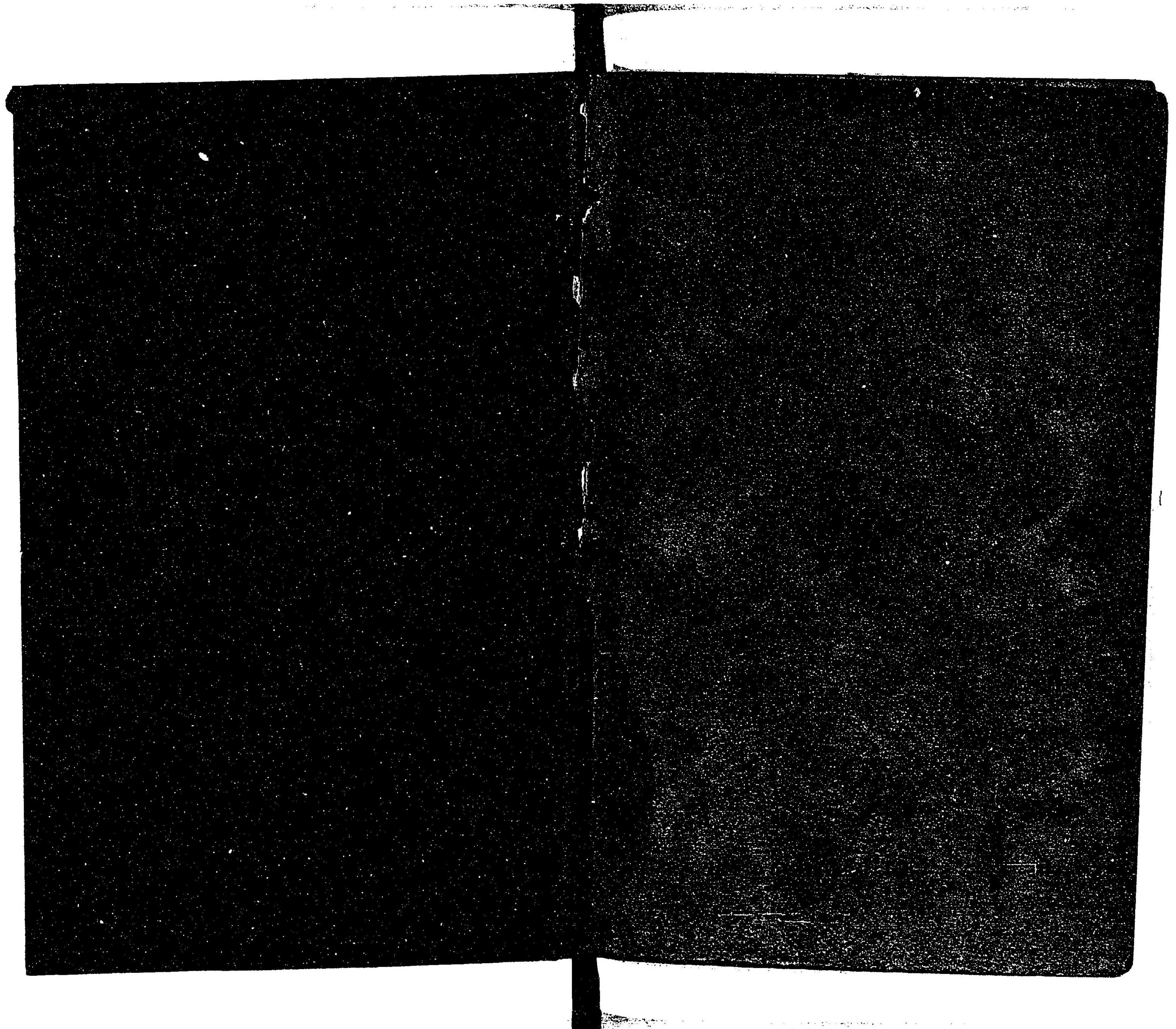
毎月二回、一日、十五日發行
定價一部金貳錢 郵税金五厘
一年分郵税共金五拾五錢
是は救世軍の機關新聞にて、繪入總振假名、
誰にでも分かる、面白くて、爲めになるこ
と此上なしの宗教新聞である。之を讀んで
罪を悔改め、基督の救を受けたる人、又献
身的の聖き生涯に入りたる人は、至つて多
い。速かに購讀なされませ。

少年兵一名

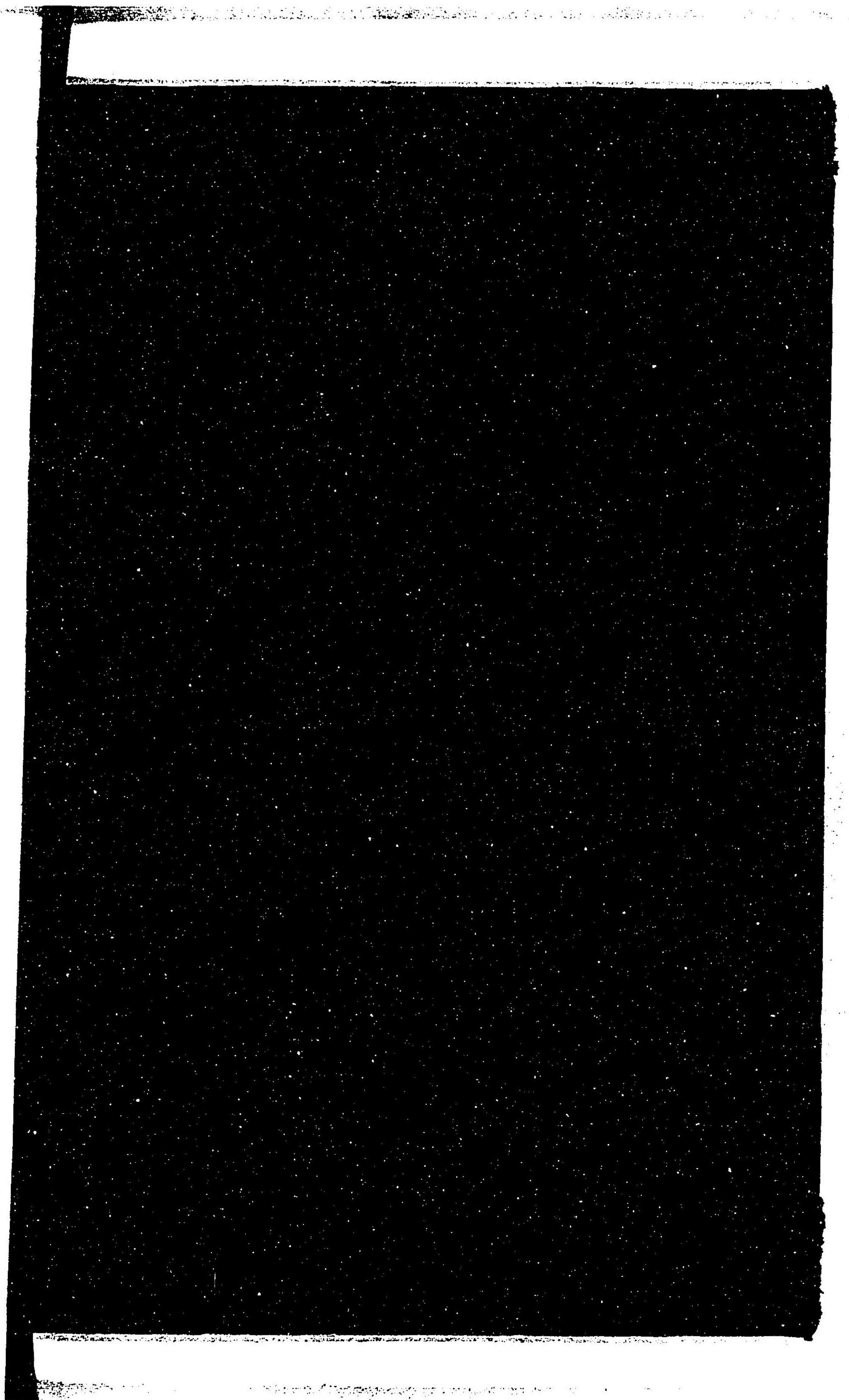
毎月一日發行、定價金壹錢、郵税金五厘
一ヶ年分郵税共たつた拾八錢也
是は「少年とよきのこゝろ」と呼ばるゝ、兒供の
繪入宗教新聞である。毎號兒供達の爲めに
なる信仰上の物語、豪傑談、聖書の話、懸
賞問題等あり。又時に親達の爲めになる文
章をも、載せつゝあり。家庭教育に心ある文
人には、是非求めて其家族の讀み物とすべ
き新聞である。

東京銀座救世軍本營

B25
122



325
122



020642-000-2

325-122

五十二文集

ブース大将 / 著

M43

ABI-0458



